

モッキンポット師 ふたたび

#上 ひさし



elisa

モッキンポット師ふたたび

井上ひさし

© Hisashi Inoue 1985

昭和60年1月15日第1刷発行

発行者——加藤勝久

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112

電話 東京(03)945-1111(大代表)

振替 東京8-3930

Printed in Japan



講談社文庫

定価360円

デザイン——菊地信義

製版——豊国印刷株式会社

印刷——凸版印刷株式会社

製本——株式会社国宝社

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。

送料小社負担にてお取替えます。

(庫一)

ISBN4-06-183409-6 (0)



講談社文庫

モッキンポット師ふたたび

井上ひさし

講談社

目次

モッキンポット師ふたたび

七

ドラ王女の失踪

五

サンチャゴの騎士団長

一〇三

明治天皇と赤い靴

一五九

モッキンポット師の性生活

一八三

解説

松田修

二三

年譜

二四一

モツキンポツト師ふたび

モツキンポット師ふたたび

1

そのころのぼくらはあいかわらず足の裏が擦り切れるほど馳けずり廻ってようやくのことでの日の飯にありつくという危い綱渡りのような毎日を送っていた。

右は字数にしてみたの七十一字、音読しても十秒とかからず、電報で打っても三百五十円で足りる短い文章だが、秤にかければこの短文の目方はおそらく地球と同じぐらい重い。もちろんこのぼくにとっては、のほなしではあるが。

なにしろこの七十一字の字間には、すくなく見積っても、ブルー一杯分ぐらいの汗と、ビール樽でひと樽分ぐらいの涙と、バケツで一杯分ぐらいの愚行と、それとほぼ同量の小悪事と、耳掻きで一杯分ぐらいの善行と、ギャング映画にして十篇分ぐらいの裏切と、キートンの映画にして五篇分ぐらいの笑いが詰まっているのだ。などといくら力んでみてもひとりよがりのひとり相撲

で、読者の欠伸の肥料になるぐらいが関の山である。冒頭の短文に多少の注釈をほどこして、そのころのぼくらの毎日がどんなであったか、もうすこしはつきり書くことにしよう。そうすれば欠伸封じになるかもしれないし、ひょっとしたら読者の皆さんの暇つぶしのお役に立てるかもしれない。そうなってくればほんとうに嬉しいのだが。

「そのころ」とは今から十四年前の春のことである。貧乏学生だったぼくらにとっては私設銀行の頭取であり、どんな仕事にも長つづきしたことのないぼくらには私設職業安定所の所長でもあり、飲み代もないくせによく飲みたがるぼくらにとってはまた私設酒場の親爺であり、そして、信仰薄きカトリック学生のぼくらにとっては靈的指導神父でもあったポール・モッキンポット師が母国フランスへ帰ったのが十六年前の春だから、「そのころ」というのはつまり、師が離日してから二年経ったころということになる。

「ぼくら」とは、土田と日野と小松の三人のことで、小松はぼくである。当時、土田は東大医学部を卒え、産婦人科医になるために東大病院でインターン修業中だった。この男は九州の産で、産婦人科の医者を志しつつ、暇さえあれば酒を飲む算段ばかりしていた。日野はそのころ教育大学の大学院で物理学の蘊奥を究めている最中で、いわば科学者の卵だったが、「いまぱつと目の前に天井が現われたらどうする？」などと非科学的なことばかり言っていた。この男は北海道の産である。ぼくは孤児院の産で、当時、J大学の四年生だった。本当なら卒業しているはずだが、稼ぐのに忙しく学校へ行く暇がなかったのだ。

ぼくら三人が知り合ったのはモッキンポット師のせいである。ほんとうならモッキンポット師

のおかけと書くべきだろうが、とてもおかけなどと書く気になれぬ。この二人と知り合いになれてよかったと思う日は年に一日か二日で、あとの三百六十四日か三百六十三日は、この二人と知り合いになるくらいなら悪魔と知り合いになったほうがずっとましだ、と思っていたからである。とにかくモッキンボット師が大家おやをしていた聖パウロ学生寮に相前後して店子たなこに入ったのが知り合ったきっかけ。聖パウロ学生寮がつぶれた後も五年ばかり、どういうわけかひとつ屋根の下で夜露を避け、ひとつ釜の飯で飢えを凌しのぎ、ひとつコップの酒でおだをあげ、ひとつ背広を廻めぐして体裁ていさいをつけながらいっしょに暮した。こういうのをたぶん腐れ縁くずれの縁というのだろう。

そのころのぼくらのねぐらは四谷若葉町の木造アパートの四帖半だった。家賃はたしか四千三百円だったと思う。入るときに権利金と敷金で五万ばかりとられたが、これはぼくが都合した。たまたま、ぼくの書いた一幕劇が懸賞募集に入選し、そのとき貰った賞金を住宅資金に充あてたのである。

アパートに移ったのは、その前の年の暮のことだが、最初の夜、土田にぼくはこんなことを言いったのを憶おもえている。

「ぼくはなにかとんでもない貧乏くじを引き当てたような気がする」

「そりやどういう意味だ？」

鮭の缶詰の蓋たをじゃきじゃき切っていた土田が訊きいた。それがそれからはじまるはずの夕食の主菜だった。主菜などというと聞えがよいが、副菜というのがその鮭缶にかける醤油なのだから大したことはない。つまりお菜は醤油をかけた鮭缶一品だけ。鮭缶を提供したのは土田である。

患者から医局への差し入れのお裾分け品だった。日野は醬油を醬油差しごと、ぼくらの新世帯に提供した。これはおそらくどこかの食堂からこつそりくすね出したものにちがいない。

「土田、おまえは黙っていても一年ちよつとたてば一人前の医者になれる。そうなたらもう生活の心配はない」

ぼくは飯盒で炊いた飯を三つの井に慎重に分配しながら言った。この役目を果すときは慎重にならざるを得なかった。なにしろぼくらは三人とも、他人の井に盛られた飯の量と自分の井に盛られたそれを、一目で比較し、その多寡をたちどころに指摘できるという才能に恵まれていた。比較文学ならぬ比較井学の大家だったのだ。

「それから日野は、当人は大学の先生になりたいらしいが、いよいよとなれば民間の大企業に就職すればよい、生活の問題は一挙に解決する。なにしろやつは教育大物理学科卒だ、引く手はあまたさ。ところがこのぼくはどうだ？　いつになったらきちんと飯が喰えるのかまるで見当がつかない。つまりお先が真暗なのはぼくだけなんだ。三人のうちで一番将来性のないぼくが、どうしてきみたちの住むところの心配までしなくちゃいけないんだらう。不公平といえはこんな不公平はない」

言いながらぼくは自分の井に飯を山のように盛り上げた。自分の井に飯を大盛りにするこによつて、せめてとりあえず不公平を均らしバランスをとろうと思ったのだ。共同炊事場で湯を沸かしていた日野がこのとき薬缶をさげて部屋に入つて来、

「おい、小松、そりゃあんまりだ。それじゃあ間もなくこの部屋に血の雨が降ることになるぜ」

とあいかわらず大袈裟なことを言つて、ぼくの手から飯杓子をひったくり、ぼくの井から白飯を他のふたつの井へ移した。

「小松の気持はよくわかる」

土田が食卓がわりのみかん箱の上に蓋を切り取つた銚缶を載せた。

「じつはそのことについて日野とも相談したのだが、おれたちもこの家賃は分担する。このの家賃は四千三百円、光熱費や雑費を合わせれば月に六千円は必要だろう。だからこれからは公平に各自が毎月二千円ずつ負担することにしよう。むろんきみが出してくれた権利金と敷金のうち、権利金については今すぐというわけにはいかながそのうちに追い追ひ返済して行くつもりでいる。まあ、敷金は勘弁してくれよ。敷金はどうせここを出る時にはきみの財布の中に戻るんだからさ」

「うん。利子のつかない貯金をしたと思つて諦めるよ」

ぼくは土田と日野の前に白飯を盛つた井を分配した。

「ほんとうはいい万年筆が一本欲しいところなんだけどね」

「そのうちに万年筆なんぞ何本でも買えるような身分になれるよ」

日野がみかん箱の上に並べた三個の湯呑に茶を注ぎながらぼくを慰めた。

「いま小松は、この三人の中では自分が最もお先き真暗だなんて嘆いていたようだけど、それは誤った考えだぜ。先行きのいちばん明るいのはじつは小松だ」

「まさか」

「だって戯曲を書いて認められたじゃないか。その調子でどしどし戯曲をひり出してごらんよ。あつという間に劇作家として通用するようになるさ」

「芝居がそう簡単にひり出せるものか。ぼくは雌鶏メジロじゃない。玉子を産むようなわけには行かないんだ」

「とにかく小松は大きなコンクールに入選したんだ。明日にでもテレビやラジオからじゃんじゃん仕事が舞い込むさ。そうなると女優さんが放つとかないよ。あらまあ先生、おやまあ先生、こりやまあ先生、とちやほやする。もてすぎて身が持たなくなる」

「夢のような話はよせ」

「夢じゃない」

日野は白飯の上に鮭の塊をのせながら、

「きつとそうなる。そのときはおれのいることを忘れるな。手を切りたい女優がいたらおれに紹介しろ。全部おれが引き受けてやる」

と言ひ、鮭を白飯といっしょに口の中に放り込んだ。

「相手の女優が妊娠でもしたら、おれに委まかせてくれ」

鮭を口いっぱい頬張った土田がもぐもぐ声で言った。

「産婦人科医としての技術をよろこんできみに提供するぜ」

「すまないなあ……」

とぼくは二人に叩頭うづまつしたが、そのついでに鮭缶の中を見ると、情けのないことに鮭缶はほとん

ど空^{から}になっていた。

だれかを煽^{おこ}てるだけ煽^{おこ}て上げてうっとりさせておき、その隙^{すき}にそいつの分を腹に収める、これはそのころのぼくらが互いによく用いた戦術だったが、こういうやり口ひとつとってみても、当時の三人の逼塞^{ひつさく}ぶりがわかるというものだ。

ところで日野の予言は当然大外^{おおはず}れで、放送局からじゃんじゃんとう鳴物入りで仕事舞い込むようなことはなかった。アパートに引越してひと月ほどして公共放送教養部制作の『日本史のなかの婦人像』という定時番組から注文がたった一本あっただけである。

「さっそくだが、きみはテレビを持っているかね」

指定された時刻に新橋田村町にある公共放送の表玄関に行くと、ぼくを待っていた三十歳ぐらいの小柄な男が名刺を突き出すようにしていきなり訊いてきた。名刺には山田義郎と刷^しっていた。

「テレビはありませんが……」

と答えると、山田はちよちよと軽い舌打ちを連発した。

「じゃあ、ぼくの番組を見たことはないだろうな。まあいい、番組の説明をしよう。きみは松村秋子を知っているかい？」

「知ってます。だって新劇の大女優じゃありませんか」

「そう大女優といえは大女優。文句が多くてギャンも高い。そのへんはじつに大女優。ぼくの番組のホステス役がその松村秋子でね、番組前半の十分間は彼女が歴史上の有名な女性に扮して芝居

をし、後半の五分間は、ゲストの日本史の先生と対談をしながら、その歴史上の有名女性についていろいろ訊く、こういう仕掛けになっている。きみに頼みたいのは番組前半十分間のドラマさ」

「一所懸命にやらせていただきます」

深々と頭をさげた。

「きみに書いてもらいたいのは淀君だ。淀君の一生を十分という短い時間のなかで手際よく料理できるかな」

自信はなかった。がしかしこれは大事なチャンスだ。しっかり掴まなくてはならぬ。いい仕事をすればまた使ってもらえるだろう。

「よく、人生は短い、かげろうのようなものだと思います」

ぼくは山田に言った。

「人生がそんなに短いものならば十分間に収まらないはずはありません」

「ほう……」

山田は目をまるくして、

「これから初舞台を踏むにしては自信满满だね。まあ、その意気でやってくれたまえ。締切は一週間後の今日の同じ時刻だ」

と言って立ちあがった。

その夜、局の図書室から借りてきた、淀君に関する資料を読んでいると、傍^{かたわら}に布団を敷いて

横になっていた日野が、なにを思いついたのかむくむくと起き上った。

「小松、その仕事を一本するといくら金が入ってくるんだい？」

「ぼくは新人だから最低のランクなんだ。つまり一分四百円。十五分番組だからその十五倍だ」
「ぼくは昼間、山田ディレクターから聞いたとおりに日野に言った。

「すると六千円か？」

「でも税金を一割引かれるから手取りは五千四百円ということになる。

「日本政府もずいぶんむごいことをするなあ」

今度は日野の向うに寝ていた土田が起き上ってきた。

「なにも小松のような貧乏学生から六百円も税金を取りあげることはあるまい。六百円といえばカレーライス二十杯分にあたる大金だぜ」

「仕方がないよ、そういうきまりなんだから。土田も日野もぼくに同情してくれるつもりがあるのなら早いとこ寝てくれよ。こっちは読まなきやならない資料が山ほどあるんだ。邪魔をしないでくれ」

「ごめん、こいつは悪いことをした」

土田はそう言いながら布団のなかにもぐりこんだ。

「でも今夜は冷えるぞ。小松、風邪を引くんじゃないよ」

「そう、身体を大事にしてがんばってくれ」

日野も掛布団を上に引きあげながら妙にやさしい口調で言った。